
千一夜

瀧河 愁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千一夜

【ZPDF】

Z9659C

【作者名】

瀧河 愁

【あらすじ】

とある風俗雑誌に書かれた記事が忘れられなかつた私は、その物語を誰かに伝えようと筆を取つた……

私は、あまり週刊誌などを好んで読むことはないのだが、いつのまに、こんな不節操な趣味を得てしまったのか。時たま、昔でいうカストリ雑誌風の、ひどく低俗な実話誌にのつては、胡散臭い獵奇犯罪の記事だと、婦人の猥らな性生活のレポートなどといった物語を、無性に読み耽りたくなってしまう時がある。

あまりこの様な事を吹聴するのは宜しくないのだろうが、そういふた娯楽誌のなどを読み、そのあまりにも妄想的で、安っぽい卑猥さに身をゆだねると、つい背筋がぞくぞくと、どうにもたまらない震えがやってきて、それが脊髄を駆け上り、脳に達するころには、甘美な揺らぎとなつり、心地良くな私を酔わせてくれるのだ。

そして、そんな私が、未だに忘れられない記事が一つある。

それが乗っている雑誌自体は、そのあたりの書店の如何わしい青年誌の間によく見かける物なのだが、その中の数ページには、どことなくその雑誌の色にそぐわない、私好みの怪しげな記事があり、その始まりには、元弁護士と書かれた、記事の作者らしい、深いハンチング帽子を、顔の上半分が隠れるほど目深にかぶつた老人の、いかにも背徳感を煽るような写真が貼り付けられている。

その本は、私の本棚に、いつでも背表紙が見えるよう、できるだけ手前に置いていたのだが、ある日、久々にそれを読み返したくなつて手に取つて見た所、やはりそれは色あせず、ひどく倒錯的な夢物語のまま残つており、どうにも心打たれた私は、それを自らの手でここに記し、「紹介する事にした。

できることならば、私だけの秘密にどじめておきたかったのだが、やはり、それを誰かに読んでもらいたいという欲望が勝つており、きっとこの記事を書いた老人も、同じ様な思いであつたのだろうと

今では思ひ。

なので、これから皆様がお読みになる物語は、決して私の創作物などではない。それは、とある雑誌の、とある文章であり、その作者である老人の人生を一遍させたといつ、嘘とも本当ともつかない物語である。

『千一夜』

あなたは、最近月を御覧になった事があるのでしょうか。

都会にお住みになっているかたは、巻き上げられたビルの埃に赤く霞む月を。山間に御住みの方なら、夜空にばら撒かれた星屑の中央で、我が物顔に輝く白い月などを、仕事帰りの夜道などで、ふと見上げた事がございましょう。

それを見る人の気持ちは様々であつて、ある者は恋人を思い、ある者は故郷を思い、またある者はその美しさに酔いしれ、夜道を歩くその足を止めてしまう事もあるのでしょうか。

しかし、私はある時から、月を見上げようとすると、手足が硬く冷え切り、ガタガタと体の芯から震えがやつて来て、まるでそんな私を月が嘲笑つているような気がして、まともにそれを見つめるなど、とても恐ろしくて出来ない、どう仕様も無い臆病者になってしまったのです。

これからするお話は、私をその様な体にした元凶とでも言いましょうか。それは私の心を蝕み、そして夜空を見上げる事すら出来な

くした氣味の悪い出来事でござります。

それは今から30年前。私がまだ弁護士をしており、立ち上げた事務所も軌道にのって、心身ともに余裕のあった時期でした。

しかしその年の秋、事務所にいた私のもとに一本の電話が入り、電話口の向こうで慌てふためいた学生時代の友人が「野宮が死んだ、自殺だ、飛び降りたのだ！」と突拍子も無い事、喘ぎながら私に伝えて來たのです。

野宮とは、私の大学時代の友人で、同じサークルに入っていた仲間でしたが、あまり仲良く接した思いでは無く、気の優しく、地味で、どこか目立たない様に生きているタイプの男だという印象だけが私の記憶に残っている程度で、たしか大学を卒業した後は、長野県の実家に帰つていたはずでした。

しかし、私はその知らせに一瞬で頭が真っ白になり、わなわなと震える手が、持つていた受話器を握り潰さんばかりに掴んでおりました。

なぜなら私はその電話が来る4日前、なんと当の自殺者、野宮からの封筒を受け取つていたのです。私はそれを、どうせ同窓会か何かの知らせだろうと、机の上に放り投げたまゝ、一度を中身を見ていなかつたのですが、それがまさか、自殺する直前の男が私に充てた物なんて、そんな氣味の悪い想像を誰が出来たでしょうか。

私は受話器を首に挟みながら、急いで封筒を手に取り、その中身を開きました。すると、中から一枚の折りたたまれた便箋が出てきたではないですか。私は電話口から聞こえてくる友人の問いかけなどを無視し、恐る恐る、そこに書かれた文字を目で追つていきました。

白く、真新しい便箋の上には、野宮のものと思わしき筆字が走りつております、よく読んでみると、簡単な挨拶から始まり、学生時代の思い出話や、自分の近況などが、とてもこれから死に行く者の書いた文面とは思えない程、えらく悠長に、長々と書かれているのです。

それを、いぶかしげながら読み進んで行くと、その最後の追伸の欄には『いつか長野に来てみてくれ。是非見せたい物がある。きっと君は面白がってくれるだろう』と、嫌に楽しげな、悪戯っぽい文字が書かれているではありませんか。

その瞬間。私の脳裏に、妄想的とも言える、とある珍奇な考えが思い浮かび、電話口に向かつて、野宮の自殺の様子についての説明をしてくれと、激しい口調で捲くし立てました。

その剣幕に驚いたのか、友人は少しどもりながらも、知つている限りの事実を私に話してくれました。

どうやら、野宮が自殺したのは昨日、つまり私に手紙を出した直後で、自宅の近くにある、切り立つた山の渓谷に掛かる橋の上から飛び降り、その下の川原に頭をぶつけて死んだそうでした。しかし、遺書のようなものは見つからず、自殺の原因はわからない。ただ葬式は身内だけで行われる予定で、野宮は半年前にお見合い結婚をしており、悲しい事に、その妻は嫁いでからたったの半年で、哀れな未亡人になってしまったそうでした。

つまり、彼の自殺の真意は、本当の所だれも解かっていないのです。それ以上詳しい事はその友人も知りませんでしたので、私は彼に礼を言って受話器を置くと、見下ろした先にある、その手に握られた手紙が、まるで野宮の怨念が詰まっている様に思え、恐ろしくなつてつい、私はその便箋を机の上に投げ出してしまいました。

その時の私は、本当の所、きっと彼は誰かに殺されたのだと朧げに、どこか確信めいた思いを胸にはせていました。

と言つのも、彼は自殺の直前に私に手紙を出し、しかもその中には私を長野に呼んで見せたいものがあるのだと書かれているではないですか。普通、これから死のうとする人間が、その様な手紙を出すものなのでしょうか。

しかし不思議なのは、どうして彼は学生時代だけの付き合いだった私に、その様な手紙を送ってきたかと言う事です。

私は覚えている限りの学生時代の彼の姿を想像しましたが、思い

出せたのは、彼は酷く天体に興味を持ち、時間さえあれば、近くの山に出かけて星空を眺めるといった趣味を持っていた事ぐらいです。そんな彼が見せたかったのは、さて、もしや長野の美しい星空だとでも言うのでしょうか。しかし、手紙の内容から察するに、彼はあるで、自分が作り上げた自慢の玩具を、もつたいぶりながら見せようとする子供の様に見受けられ、私には、それをとてもただの星空を見せたかった様には思えなかつたのです。

それから数週間程、私は弁護士の仕事に打ち込みながらも、野宮から送られてきたあの手紙が頭を離れませんでした。

彼は何を考え、何を思い、私にあの様な手紙を残して死んだのか。たまに、彼の手紙を読み返してみては、そんな疑問が頭の中にひしぐめきだしてしまい、その思考の渦は寝床に入つても消えず、今眠つたら、死んだはずの彼が枕元に立ち、私の耳元に囁いて來るのではないかと、一晩中眠れずに朝を迎えた事すらあつたのです。

そして、野宮の自殺から手紙を受け取つて調度一月が経ち、私は意を決して一週間程の休暇を取り、長野県の野宮の実家へと向かう事にいたしました。

もちろん、それは私を悩ませ続けた手紙の一文に書かれた、彼が私に見せたかつたという物を確かめる為であつたのですが、同時に、野宮の自殺の真意を暴きたいという、後ろめたい好奇心に心を揺らされたからであります。

しかし、その好奇心こそが、すでに私が、野宮の残した恐ろしい呪縛に囚われていた証拠であるのに、愚かにも、その頃の私はまったく気が付かずいたのです。

彼の実家は長野県の坂井戸村という、新潟県との県境に程近い山間の村にあり、私はその近くのあばら屋の様な駅を降りると、呼び寄せたタクシーに乗り、野宮の実家へと向かいました。その最中、私はタクシーの窓から見える山脈の頂上からふもとにかけて広がる

暖色のコントラストや、枯れた稲穂が波打ちながら揺れる階段作りの田畠、細く、蛇のように曲がりくねった山道の上が隠れるほど広げられた枯葉の絨毯や、その天井に覆いかぶさる、赤や黄色の紅葉アーチといった、溜息を漏らさずにはいられぬ景色を、まるで御伽の国に迷い込んだ様な気持ちで眺めておりました。

そんな濃厚な自然に私が圧倒されると、いつのまにか登り続けていた坂道が終わり、ふと目の前に、まるで秋色に染まった山の一部のことく、紅い村の姿が見えてきました。

紅いと言うのは屋根の事で、その村にある民家の屋根はなぜか全て同じ赤色に染められているのです。

その巨大な紅葉の間をタクシーはすり抜け、さらにその道が林の間の上り坂を越えると、その枯れた木々の隙間に、先ほどみた家々と同じ、赤いトタン屋根が見えてきました。

それこそが、私の目的地である野宮家であります。坂道を去つてゆくタクシーを見送った私は、林の合間にぽつんと建つその家を見上げました。

その家の壁は、長い間風雨に晒されてきたのが一目でわかる程黒ずんでおり、くすんだガラス張りの玄関や、歪んだ雨戸などは所々継ぎ板で直した後が見受けられ、その上を見上げると、薄く透き通つた秋空の下にはまるで不釣り合いな、氣味が悪い程真っ赤に塗られたトタン屋根が輝いています。どうやら、この村の屋根は全て同じ色にする風習がある様です。屋根には所々、新しく塗られたペンキの垂れた後が残つており、それが杉林の影に染まって、まるで、どす黒い血がトタンの上に滴つているかの様に見えました。

私は思わず、頭の割れた野宮の死体を想像してしまい、慌ててそこから目をそらすと、胸に沸いた不安を拭えぬまま、急いで野宮家の玄関を叩きました。すると、すぐに中から若い女性の声が聞こえ、立て付けの悪いドアが軋みながら開かれると、そこに、色の白い、美しい白人女性が立っていたのです。

それはもちろん、亡くなつた野宮の残した未亡人、野宮美香子さ

んだつたのですが、私が彼女を一目見たとき、外国の方と勘違いしたのは無理もございません。なにせ彼女ときたら、肌の色は透き通り、目は人形の様に大きく、睫毛も長く、手足も細長くまるでモデルの様。髪の色こそ黒いものの、どこか、田舎の民家から出てくるのは悪い冗談の様に思える程、彼女は日本人離れした美しさをその身に称えていたのです。

後で聞いた話によると、彼女はどうやら祖父がドイツ人だといふ、いわゆるクオーターというやつで、よく外国人の人と間違われるのだと笑つて話していました。それも当然でしょう、今でこそ珍しくは無い物の、当時の田舎であれ程の美女がいれば、誰だって異邦人と疑いたくもなります。

さて、そんな彼女につれられ、昼間だというのに夕暮れのごとく薄暗い野宮家の中に足を踏み入れると、そのまま茶の間に通され、そこにまっていた着古した着物姿の白髪の老婆、野宮雅恵に挨拶をする事となりました。

雅恵さんはかなり年を召されていましたが、芯のあるしつかりとした目で私を見据え、この度は私の息子のせいで申し訳ないと、いきなり床に手をつかれたので、私はそれを慌てて制しました。野宮の父親まだ若い頃に死んだそうで、女一人で色々と苦労されたのでしょうか、畳の上に付かれた両手はまるで力仕事をする男の手の様に荒く、皺にまみれたその皮膚は赤黒く浮腫んでおりました。

その後、私は持ってきたトランクから折畳んだ便箋を取り出し、雅恵さんの前に差し出しました。もちろん、それは野宮から送られた手紙であり、それが本当に野宮の書いた文字なのか、雅恵さんに確かめてもらうつもりでした。彼女はその手紙を、皺くちゃの顔を悲しげに歪めながら読み終え、私は本当にそれは息子さんの字なんかと尋ねました。すると、雅恵さんは目を潤ませ、確かに息子の字だ、間違い無いと、涙ぐみながら言つのです。

しかし、私は仕事柄か、何事も確實を求める性質でしたので、試しに隣の美香子さんにも読んでもらいましたが、帰ってきた返事は

同じ。野宮は、本当に私に何かを見せるつもりで、この手紙を書いたのです。それはつまり、彼の自殺が疑わし物に変わる事を意味しました。

私は、袖で目元を拭う雅恵さんに悪いと思いつつも、彼の自殺した理由についてたずねてみました。すると雅恵さんは小さな嗚咽をもらしながら、ぱつり、ぱつりと、自殺した息子の思い出をかみ締める様に言葉を紡ぎ始めたのです。

野宮は、幼い頃は病弱であり、家から余り外に出ない色白少年だったそうで、その為友人も少なく、彼はいつも家に籠り、一人で色々な遊びをしていましたのですが、そんな彼が一番熱中したのは、誕生日に買つてもらった望遠鏡で、夜な夜な自室の窓から星空を観察する事でした。彼は小さな星から大きな星、流星、彗星と、ありとあらゆる星の、その宝石の様な輝きに心を奪われ、その熱中振りは、小さいながらも、将来の夢は天文学者と両親に話す程だったようです。

そんな彼も中学生になると、突然父親が亡くなり、母親は家庭を守るために、朝も昼も働き詰めになり、野宮も朝の新聞配達や野良仕事などを手伝っていたのですが、それがより彼の孤独を強める事となり、中学になつても誰かと遊ぶ様な機械は無く、家に帰つても誰も自分の事をかまつてもらえない野宮の心を癒すものは、長野の深い闇に散りばめられた、あまたの星々だけになつてしまつたのです。

その頃から、彼の天体に対する執着は、段々とゆがみ始めてきたのだそうです。

夜になると、彼は家を抜け出し、裏手にある小さな杉林の丘を登り、その上の開けた草原に望遠鏡を置いて、彼は一晩中夜空を見上げたそうです。止めて、彼は聴く耳をもたず、例えどんなに寒い冬の夜だろと、彼は必ずその丘に登り、接眼部分の丸い後がクマになつて残るまで、ひたすら天体観測に没頭してはいたのです。

さらに彼は、自分の小遣いを全て天体望遠鏡や、天文図などの書物につき込む様になり、学校などで食べる為のお金すら使つてしまい、昼休みにはパンの耳などをかじつて過ごすまでになつていきました。

そんな天文狂いになつた野宮でしたが、決してその趣味を他人に話す事はありませんでした。なぜなら彼は、自分のその趣味が暗く、とても陰気な物だと思い込んでいたので、そんな事を誰かに話したら、すぐに陰口を叩かれると怯えていたからなのです。

しかし、他人に言えない陰影の楽しみ程、人を虜にするものはございません。彼の天文狂いは日に日にエスカレートし続け、大学に進学した後も、彼は様々な山や海、はたまた高層ビルの上などで星を観察し、その観察記録を匿名で研究者等に渡したり、また天体に関する論文を書き上げたりして、学者達の間ではそれなりの評価を得ていたのだと言います。

そんな野宮が大学を卒業し、実家に戻つてきた時でした。彼は母親に、東京で面白い本を見つけたといって、一冊の黴臭い古本を差し出したそうです。それは、タイトルこそ忘れてしまつたそうですが、どうも月に関する、オカルト染みた怪奇本だったそうです。

これは、後で調べた事なのですが、月の持つ不思議な力というのは、狼男をはじめ、様々な伝説や逸話となり、それこそまだあの青白い月光が、太陽の光が反射した、いわば死んだ光だという事すら解からぬ昔から、そのもつ奇怪な力が信じられていたそうです。例えば潮の満ち引き。これは月の引力によって発生しているのは周知の事実でありますが、その引力が、何も海だけではなく、我々人間の体に影響を及ぼしていないと誰が言い切れるでしょう。

事実、これもまた奇妙な事ですが、とある学者が、満月の夜には殺人事件　とくに残酷な手合いの代物。バラバラ殺人や、幼児殺害、食人症者による凄惨な事件などといった、身の毛もよだつ、鬼の様な所業が多く発生するのだと統計学的に説明できといいます。しかし、それが解かつた所で、その月の魔力がどうして人を狂わさずに終えぬのか……そこまでの事は何も解かつておらず、ただ、

そうした噂や統計などの曖昧な結果だけが残っているだけで、実際の所、それはまだオカルトの域を出れない、ただの諸説止まりなのです。

しかし、天文青年である彼ならば、その手の話などは眉唾だと一蹴してしまう所、何故か彼は、そんなくだらない本を大事そうに抱えて、しばらくの間、その本を穴が開くほど読み続けていていました。まるでそれは、何かに取りつかれた様に、仕事の合間や、食事中、寝る前と、飽きることなくその本を読み返し続けていたそうです。

そして彼の身にどんな変化があつたのかは分かりません。もしかしたら、彼もまた、その妖光に中てられたのか、はたまた、純粹過ぎるほど、天文にのめり込み過ぎた為なのか……いつのまにか、あの漆黒に浮かぶ宝石の全てに及んでいた野宮の興味は、その中央で煌々と佇む、月の青白い輝き唯一つに囚われてしまったのだそうです。

それからというもの、彼の部屋にはどこから集めてきたのか解からない、月に関する奇怪な書物で溢れ帰るようになり、中には魔術だと、大量殺人に関する本などを部屋に持ち込んでは、それを元に、彼は月を観察し、様々な実験を繰り返していました。

実験といつても、それはとても健全で、科学的と言えるものではありません。例えば、彼は満月の夜には自殺者が増える事を証明しようと、自殺した人間の死亡日時を集め、それと月の記録を照合してみたり、またある時など、とある魔術について書かれた本から、月を利用した使者を呼び出す口寄せの術を知ると、満月の晩、彼は近くの墓地に向かうと、生きたウサギを手に持ち、死者の眠る墓の上でそのウサギの首元に鎌を突きたてるのです。すると、みるとうちに、鎌の食い込んだ兎の、真っ白な毛の間から鮮血が溢れ出し、その血が溜まつた地面の上に死んだ動物の骨を置くと、生臭い匂いが立ち込める墓場の真ん中で、怪しく光る月を見上げながら、ぼそぼそと不思議な呪文を唱え始めるといった、実に怪奇珍妙な代物な

のでした。

また、彼は月そのものの美しさにも興味を示したのでしょうか。彼は外に出かけると、良く月の写真を集めきては、部屋の壁に飾つていたそうですが、それも何年かすると膨大な量になります。

ある時、母親が彼の部屋を覗いてみると、驚くべき事に、なんと天井や、壁、はたまた窓にいたるまで、部屋のありとあらゆる場所が、額ふちに入れられた、三日月、半月、満月といった、様々な月の写真で埋め尽くされているではありませんか。そんな無数の月に囲まれた部屋の真ん中で、彼は回転椅子に座り、まるで子供の様に、くるくると椅子を回しながら、口の端を吊り上げ、気見の悪い高笑いを上げているのです。母親は戦慄し、恐る恐る、何をしているのか彼に尋ねると、野宮は急に椅子の回転を止め、「今、自分は月の力を体いっぱいに感じてゐるの。こんなにも沢山の月に囲まれて、僕は今体の底から力が湧き上がってきてる、どうだい母さん、こっちに来て、月を眺めてみないか」と、その顔にへばりついた笑みをぐにやりと歪め、血走った物狂いの眼でじっとこちらを見ていたそうです。

恐ろしくなつた母親は、息子を正気に戻さなければと色々な所から縁談を持つてきました。彼女は、自分ではもう息子を止められぬと悟り、彼の伴侶となる妻さえ家に向かえれば、きっと彼にも自分のしている事の恐ろしさが判るだろうと考えたのですが、野宮はそんな母親の話も聞かず、持ちかけた縁談話を全て断つてしまい、ただ毎日を、怪しげな月の研究に没頭し続けながら過ごしていたのです。

ですが、それから数年が経つたある時、ふいに彼は、母親に向かつて、見合いがしたい、縁談を持つてきてくれと言い出したのです。母親はいつたい何の冗談かと耳を疑つたそうですが、これを逃しては一生息子は気違ひのままだと、彼女は急いで縁談を取り次ぎ、見合い相手は息子の希望で、母親の知り合いである、隣町に住む美人と評判の美香子さんになりました。

当時、彼の異常な性格などは、家族以外のものは誰も知りませんでしたので、美香子さんとの縁談は予定どおり行われました。見合いの席の彼は、いつもの様な物狂いの日では無く、まるで大企業に勤める好青年の様な物腰や口調、笑顔を浮かべていたので、何も知らない美香子さんや、その母親はともかく、当の雅恵さんは思わず声を上げてしまいそうに成る程、息子の変わり身に驚いてしました。

いつたい、息子は何を考えているのか。そんな母親の心配も他所に、爽やかな好青年を演じきつた彼はその後一月程で、何も知らない美しい美香子さんを妻に迎える事となつたのです。

それから野宮は、まるで人が代わったかの様に、田畠の手入れや、農作業に精を出す様になり、美香子さんとの新婚生活を実に楽しげに過ごす様になりました。彼はどうやら美香子さんに惚れきついたらしく、彼女の為にと、彼が少年時代に良く月を眺めていた裏山の草原に、3ヶ月がかりで見事な池を作つたり、自分の衣服も買わず、美香子さんに上等な着物などを買い与えていたりしたのです。

もちろん、月の研究はまだ続けていたそうですが、それも美香子さんに自分の内側を知られるのが恐ろしかつたのか、決して彼女を自室に入れるような事はなく、また彼も殆どその部屋に籠るような事もなくなり、母親はやつと息子がまともに戻つたと胸を撫で下ろしていたそうでした。

しかし、それから半年が過ぎたある夜。雅恵さんが茶の間で縫い物をしている時です。突然、一階から悲鳴の様な大きな叫び声が聞こえ、次に階段を転がる様に下りてくる足音が響き、開け放たれた襖の向こうに、着物の乱れた野宮が、袖の先に鋸付いた草刈鎌をぶら下げ、一心不乱に何事かを喚き散らしながら廊下を駆け抜けてゆくではありませんか。

彼女が慌てて廊下に飛び出すと、すでに開け放たれた玄関には野宮の姿は無く、代わりに後ろから、片腕から血を流した美香子さんが、よろめきながら階段を下りてきたのです。慌てて美香子さんに

話を聞くと、なんと野宮が鎌を振りかざし、突然自分を襲つてきたのだと言います。雅恵さんは混乱し、とにかく息子を探し出さねばと外に出ましたが、夜もふけ、辺りは深い闇に包まれておりますので、とても一人で野宮を探し出す事などできず、途方に暮れながらふと上を見上げると、異様に大きな満月が、雲ひとつ無い夜空に浮かんでおりました。彼女は家に戻るとすぐさま警察に連絡し、事の次第を全て話すと、警官と地元の消防団による搜索が夜通し行われたそうです。

そして、翌日。近くの渓谷に掛かつた橋の下、朝霧のまとわり付く川原の上に、どす黒い血の池が出来上がつてあり、その中央に飛び降りた野宮の、柘榴の様頭がぱっくりと割れ、体が奇怪に捻じ曲がつた無残な死体が発見されたそうです。

雅恵さんは、その話を終えると、今思えば、息子は最後、「月だ、月が居る」と叫んでいたのだと言い、私は、震日の前の老婆の乾いた唇から語りられる野宮の本当の姿に怯え切り、まるで道を間違え、闇夜の向こうに袋小路が現れた様な、深く、底知れぬ未知の恐怖が自分を飲み込んでいるのに気がついていました。

なんという事でしょう、もしその話が本当だとするならば、彼はいつたい最後に何をみたのでしょうか。いえ、そんな問い合わせは無用です、まさに彼は、長年追い求め続けた月の神秘というやつに呪い殺されてしまったのですから。

しかし、その時の私には、そんな突拍子も無い話を作り話などと思えず、ただ、歪な不安の塊に胸を詰まらせる私を、哀れむ様に見つめる雅恵さんと美香子さんの目を、不安げに見つめておりました。

まさか、あの野宮がその様な狂人だったとは。世の中には、実に不思議な出来事というものがあるのです。

そして、その事実は、私に、彼の見せたかった物が、当然彼が熱中していた月に関する物だと容易に想像させました。

しかし、このよつやな変質的な趣向の持ち主です。もしかしたらとんでも無く気持ちの悪い代物が用意されていたのでは無いかと疎み上がつていたのですが、正直それがどれ程の物なのかも気なつて仕方がありません。

そう、その時の私は、まるで月に見入られた彼と同じように、野宮の残した深い闇の中を、おつかなびっくり歩いてゆく事を、何故か酷く楽しんでいたのだと思います。

ですから私は、湧き上がる薄暗い好奇心に掻き立てられ、翌日になつてすぐ、美香子さに頼んで彼が私に渡そうとしていた物を探るため、部屋を見せてもらう事にしました。

彼の部屋は警察も入ったそうですが、部屋の様子は彼が死んだ時からあまり変わってはいなそうでした。ですから、私が彼の部屋に入った時に感じた、匂い立つ悪意は、まさに彼の心の投影したものだと考えて良いでしょう。

カーテンの掛かつた窓から差し込む細い光に浮かぶ埃が辺りを舞い、秋だというのに、妙に湿った、かび臭い暗がりの向こうで、話に聞いていた、無数の月の写真達が壁を多い尽くしているのが見えました。

その時の感覚をどう表現したらよいのか、どうも言葉につまるのですが……そう、普通夜空には一つしか無い月です、それが四方の壁に数十個、ありとあらゆる形の月が並べられて、それらが右から、前から、左からと、四方八方から、まるで怯える私を嘗め回す様に見つめているような気がして、その直後、急に体の奥底からじず黒い物が這いずり出して来て、言い知れない、どこか暴力的な衝動が、私の体から溢れ出そうと必死にもがきはじめるのです。

その感覚に耐え切れず、思わず眩暈に襲わ、床にはいつくばりながらも、私はなんとか彼の残した書物を調べようと、必死になつて部屋を漁り始めました。

実際、その部屋の光景よりも、彼の集めた書物のほうが異常だつたといえるでしょう。彼の書物の大半は、殆ど月に関する伝承や事

例、さらには歴代の異常殺人事件に関する記事や、山羊の頭をした男の古拙な版画絵が描かれた魔術本、古めかしい洋書や和書など、古本やでも滅多に見かけない、実に奇怪な内容の黒臭い書物で埋まつていたのでした。

私はとてもその様な本を全て読む気にはならず、きっと、何か手がかりがあるだらうと、彼の残した論文やメモなどを探る事にしました。

しかし、それから暫らく彼の部屋を探したのですが、どうにもその様な論文らしきものが見当たりません。ももしかしたら、警察が押収したのでしょうか。いえ、いくら警察といえども、物狂いで死んだ男の残した論文などに興味を示すものなのでしょうか。しかも事件は自殺という形で終わっているのですから、なにも論文やメモなどを押収する必要は無いはずなのです。つまり私は、彼が残した物を探すどころか、ただ彼の作り上げた暗闇の、さらに奥深くに追い込まれてしまつただけでした。

頭を使いすぎたのか、それとも私を覆う無数の月や、氣味の悪い本の群れに囲まれているせいなのか、乗り物に酔ったような、妙な眩暈を覚えた私は、とりあえずその部屋を去り自室に戻り、畳の上に寝転ぶと、野宮からの手紙を穴が開くほど見つめておりました。月の魔力について研究し、その結果、結局自身も、その魔力に食い殺されてしまった野宮。

そんな彼が、いつたい、何を私に見せようとしていたのでしょうか。そんな事を考えれば考える程、その狂気に私も取り込まれてしまいそうな恐ろしさが募り、私は思わず目をつぶつて、布団の中に潜り込みました。

すると、その暗闇の向こうにぼんやりと、まるで映画のスクリーンの様な朧げな光が見え、そこに、濃い群青色の夜空に、幾つもの月が輝く、見たことも無い奇怪な光景が現れたのです。そしてその下には、馬鹿に大きな天体望遠鏡を熱心に覗き込む男の背中があり、次の瞬間、何かに気が付いた様に男が振り返ると、頭がひしゃげ、

真っ赤に血で染めた野宮がまつすぐにこちらを見つめながら、その口の両端を一タリと吊り上げてみせるのです。

その晩私は、固い布団の中にもぐりこんで、恐らく、その空に満面と月が輝いていたであろう、坂井戸村の深い夜が通り過ぎるのを、じっと身を硬くして待ち続けておりました。

それから数日の間、私はあまり手紙や、野宮の自殺について考えるのを止ようと、辺りの美しい野山を散策する事に精を出していました。

なんだか、妙な胸騒ぎと言いましょうか。いくら好奇心旺盛な私でも、これ以上この事に首を突っ込んでしまったら、あの布団の中でみた幻覚が永遠と続いてしまいそうな感覚。もしそうなつたら、一度とそこから戻れなくなってしまう気がして、できるだけ、事件の事から意識を遠ざけようと苦心していました。

その点において、坂井戸村というのは実に優れた土地で、野山を歩けば目が痛くなる程に鮮やかな秋色に染まった木々がありますし、近くには山の間を縫うように流れる大きな川もあり、その上を流れしていく色取りどりの落ち葉を見ながら、川の流れるせせらぎと、どこからか聞こえる鳶の鳴き声に聞き入る事もできるのです。

そんな時美香子さんが、私が良く散歩に出かけているので、是非見て欲しい物があるといって、私を野宮家の裏手にある小高い丘になつた杉林へと案内してくれました。

そこへ向かう林の間を抜ける獣道の様な坂には、枯れ落ちた杉枝が敷き詰められており、私の様な人間には、とても楽に歩ける場所では無いのですが、そんな道を悠々と歩いていく美香子さんの背中が目の前にあり、彼女に負けじと無理をして、息も絶え絶えにその坂道を登り終えました。すると、急に今まで鬱葱と茂っていた杉林が開け、そこに透き通った水が湛えられた小さな池の姿が見えていたのです。

池というのは小さすぎる、まるでどこかの庭園にある様な大きさなのですが、枯れ草が茂るその池の畔には目の冴える様な見事な枝垂れ紅葉があり、それが薄い雲の浮かぶ青空と一緒にになって、まるで鏡の様な池の水面にそつくりそのまま写りこんでいるのです。

そんな溜息の出る様な光景を、私の隣で、芯の定まらぬ目つきで眺めていた美香子さんの言つには、そこが雅恵さんが話していた、彼女の為に野宮が作った池だそうでした。

ですが、その池もさることながら、その波打つ水面の輝きの中に立つ美香子さんの、どこか影のある悲しげな横顔ときたら、まるで素晴らしい絵画のじとく、見るものを引き込むような魅力があるので

す。

私はそんな悲しみに暮れる未亡人にその様な気持ちを抱くのは不謹慎だと、すぐにその感情を押さえ込もうとしたのですが、何故か押さえ込もうとすればするほど、脈の打つ音が耳の後ろで大きくなり、彼女の肩の上で切り揃えられた黒髪の下にのぞくうなじや、細長い手足、作り物の様な白い肌に目を奪われてしまい、私は結局、終始彼女を見つめたまま、その池での時間を過ごさなければなりませんでした。

その後、野宮家に帰ると、私の部屋に美香子さんがお茶を持ってきてくれ、色々と話をする機会がございました。

彼女は野宮の隣の村で生まれたそうですが、そこも殆どこの辺りと似たようなものだと思います。彼女は生まれてこの方、一度もこの土地から外に出た事が無いそうでした。

ですから、その様な閉鎖的な山陰で過ごして来た彼女は、私の弁護士の仕事や、東京での出来事などにとても興味を持ち、私は一方的に自分の話をさせられていきました。

そういう時の美香子さんは、先ほどの様な影のある美しさとはまた違った、まるで少女の様な無垢な笑みで私の顔をみつめるので、私は目のやり場に困り、今度は、彼女からめを逸らし、終始うつむ

き加減で話を続ける羽田になりました。

しばらくして自分の話が尽きてしまつと、今度は彼女の話も聞いてみたくなつて、私は何か話してくださいと、田を細めている美香子さんに言いました。

すると美香子さんは、少し困った様に眉をハの字に曲げ、それならば、私の夫のお話でもいたしましようと、自嘲気味な微笑みを浮かべるのです。なにせ野宮家にきてから、彼の部屋を物色したりしている私は、彼女は気を使って私にそんな話をしだしたのでしよう。

しかし彼女は、どこか妙に嬉しそうな口調で、野宮についてや、たつた半年という短い結婚生活の思い出話を話してくれるので、私は安心して彼女の話に耳を傾ける事ができたのです。その話の中で、彼女はいかに野宮が自分を愛していくくれたのか、そして自分もその愛にいかな形で応えていたのかを、一言一言、かみ締める様に話しておりました。それはもう、他人に話せば煙たがれる程ののろけ話でしたので、私はだんだんと、この美しい美香子さんを自分の物にした野宮を羨ましくすら思える程になつていきました。

そして、最後に彼女はいきなり、彼が死ぬ最後の晩の話しをしようとしたので、私は慌ててそれを止めました。すると、彼女は申し訳なさそうに目を伏せ、自分は、野宮があの様になるまで、それ程月に狂つていたとは思いも寄らなかつたと、悔しそうにぽつりと呴くのです。

そこで、私は野宮の論文やメモの類が見当たらなかつたのを思いだし、話の筋を逸らそと、それについて尋ねてみる事にしました。すると、美香子さんはただ首を振り、夫の研究などは何も知らないので、きっと警察の方が持つて行かれたのでしょうかと、俯いて言うばかりでした。

どうやら、妻である美香子さんには、野宮どころか、雅恵さんも何も言わないのでしょう。当然真実を話でもすれば、美香子さんがいつ離縁を申し出て、その噂が辺りに広まるか解かつたもの

ではありませんので、その事は当然といえば当然でした。

そしてしばらぐした後、美香子さんはそろそろ夕食の準備をしなければと、机の上の湯のみやらをお盆に載せると、私に向かって、この様な田舎で、こんな話しが出来るのは貴方だけです、よろしかつたら、またお話に付き合つてくださいと、どこか儂げな微笑みを残して、襖の向こうに消え、残された私は、早鐘の様に打つ胸の鼓動を感じながら、古びた階段の軋む微かな音に、じつと聞き耳を立てていました。

今思えば、きっと私は彼女に愛情に近いものを抱いていたのだと思います。いえ、あの時の気持ちを恋や愛などと、純粋な言葉で表すのは少し違うでしょう。それは、どこか肉欲的で、私の中に眠っている雄の部分を操られている様な感覚。あのうつすらと、濃い霧のかかつた様な、美香子さんの怪しげな微笑みは、その様に私の原始的な欲求を疼かせすにはおらず、お恥ずかしい話なのですが、その夜の私は、時折彼女の姿や体を思い出しては、ふと寝床に彼女がやってきて、その乱れた着物をはらりと脱ぎ捨て、そのままども口に出して言えない様行為に耽るといった、実に卑猥な妄想に酔いしれていたものです。

その様に魅力的な美香子さんでしたが、それも、後雅恵さんのある言葉を聞くまでの話しだって、その後私は、彼女の持つ、あの虚ろな美しさの影に怯える様になりますはじめるのです。

それは、私が坂井戸村にやつてきてから1週間程たつた日の夕暮れでした。やはりまだ、野宮の自殺について、色々と思案するのを止められないまま、私が近くの小川で釣りをして帰ってきた時、ちょうど野良仕事から帰ってきた雅恵さんが道の向こうから、重そうな鍬を担いで参りました。

その姿があまりにも辛そうだったので、私は雅恵さんに何か手伝

う事は無いかと聞くと、雅恵さんは、なら、庭の落ち葉でも集めてくれと頼まれましたので、私は釣竿を片付けると、急いで簾と隈の手を持ち、落ち葉の敷き積もった家の玄関の掃除に取り掛かりました。

それをおがあまりにも一生懸命やつていたからでしょう、部屋様の着物に着替えた雅恵さんが遣つて来て、今まで仕事をしていただいたにも関わらず、私の反対を押し切つて一緒に庭の掃除をし始めたのです。

その最中、私が雑談の合間にふと、美香子さんがあの様にどこか物鬱氣な目をするのは、やはり野宮の自殺が相当ショックだったのでしょうかねと尋ねますと、雅恵さんは何故か、その言葉に首を横に振り、美香子さんは、野宮と結婚してから、時々、あの様に陰気な目をする様になつたのだと、落ち込んだ声で言つのです。

それを聞いた瞬間、私は簾を履く手を止めて、思わず黙り込んでしまいました。

考えてはならない。そう思つたのですが、もう止まりません。

なぜなら、美香子さんはあの様に、野宮に対しての愛を、私にあれほど熱く語つたつていたのです。ならばどうして、あの美麗な顔に、あんな暗い影を落とすはめになつたのでしょうか。それが野宮の自殺が原因でないとすれば、彼女は野宮との結婚生活の間で、何か上手くいっていない部分があつたと言う事なのでしょう。疑問が疑問を呼び、自然とその答えを模索する自分を、私は浅ましいと思いました。

そしてその結果。私はある一つの、身震する程の恐ろしい考えが頭に浮かんできてしまったのです。

私は、そんな訳がない、いつたい私は何を考えているのだ、いい加減にしろと、必死に振り払おうとしたのですが、そんな行為も虚しく、その悪魔の様な妄想は、私の中でどんどんと大きくなり、ついにそれは、はつきりとした禍々しい姿を、私の前に現わし始めるのです。

そう、もしかしたら、美香子さんは実の所、あの野宮の隠していた倒錯的な研究の全てを知っていたのでは無いでしょうか。

そして彼女は、全てを解かっていながら、まるで順風満帆の日々を送っている様に周りの人間を騙し続けていたとしたら……。

私は咄嗟に、野宮が死んだ日の前後に、彼女におかしな様子がなかつたか尋ねました。すると、美香子さんは野宮が自殺した日の翌日、何故か朝から庭先を掃除して、集めた落ち葉を燃やしていくそつなです。雅恵さんは、きっと美香子さんも気が動転していて、それを落ち着けるために掃除をしていたのだろうと言っていましたが、私はその話を聞いて、まったく別の事柄を想像しました。つまり、それは、野宮の部屋から無くなつた論文やメモは、その焚き火の中にくべられてしまつていたのでは無いかという、自分でも呆れるような想像なのです。

ですが、雅恵さんに野宮の論文について聞いてみると、警察はその様なものを決して持つて置いてはいないと言うのですから、不幸にも雅恵さんは、私の想像を現実から程遠く無いものに変えてしまつたのでした。

その晩、私は皆が寝静まつたのを見計らつて、こつそりと野宮の部屋に忍び込み、もう一度、今度は丁寧に、抜かりなく、あの膨大な書物を調べてみる事にいたしました。

なぜ、私がその様に、泥棒染みた行動にでたかと聞かれても上手く説明できないのですが、思えば、きっと私は自分が考えついた罪深い推理に一番見合つ行動を、まるで役者の様に、それらしく振舞つたのではないかと思います。

そうやって忍び込んだ月の部屋で、私が片つ端から書物を読み漁るのは大変な苦労でしたが、それもそこから得られた結果に比べれば、たいしたものではありません。

私は本を調べるうちに、ある絵画集が随分と手垢で汚されているのを認め、その中身に目を通してみますと、とあるページの端に、

覚え書きのような小さな文字が書かれているのを見つけたのです。

それには、『美香子』という鉛筆文字が走っており、その終わりの矢印は、そのページ中央に描かれていた日本画らしき、纖細なタッチで、まるで写真の様な、真に迫った迫力で描かれた、色の白い満月を指し示しているのです。

はたして、それは野宮がなんの為に記した文字だったのでしょうか。私はその部屋を抜け出して自室に戻ると、あれこれと様々な可能性を考えては、それを打ち消すという行為を繰り返し、それから小一時間程たつた辺りで、もうこれ以外には無いという所まで考えを煮詰めあげたのでした。

そしてその結果、私は、つまりあのメモが、野宮があの絵に関する何かを美香子さんに与えたという証拠だという考えにいきつきました。すなわち、美香子さんは、野宮の魔物の様な本性をしつていたばかりか、その如何わしい行為研究の対象とされ、そして彼女もそれを受け入れていたとしたら……。そう考えると、色々と不合理だつたものが、まるで調度良い仕舞いの方を見つけた様に、全て同じ戸棚に上手いこと収まってくれるのです。

例えば、野宮が急に縁談を進める様に言つた事も、それも全て、美しい美香子さんを手に入れ、自分の研究を、より深く、陰惨なものに変貌させようとしていたら納得がいきます。そして野宮は上手い具合に彼女を手に入れ、そして彼女すらも月の魔力に貶めていたとするならばどうでしょう。すると、美香子さんが、月の研究について知らない振りをし通したのも、その手で野宮の論文を処分してしまつたのも十分納得がいってしまうのです。

では、あのメモはいつたい何を意味するのか。そこまでは私にもわかりませんでしたが、それに一番しつくりとくる答えは、野宮が私に送つた手紙の最後の一文にあつた、彼が見せようとしていたある物に関係するという憶測でした。

そして、それはおそらく、画集の走り書きにあつた通り、あの美麗な未亡人が全て握つているのではないのでしょうか。

彼女は、野宮からそれを受け取つた。そして本当の意味で月光に囚われてしまつた美香子さんは、それを使って、野宮を自殺に追い込んだとしたら……すると、彼が最後に口走つたといつ、気のふれたあの言葉さえ、なんとなく意味を成してくるように思えてしまうのです。

その様な、決して理論的とはいえない、邪な想像を逞しくした私は、それからというもの、日に日に大きくなつてゆく疑惑にそそのかされ、夫を自殺で無くした哀れな未亡人を暗い横顔を、事あるごとに盗み見てしまう様になつていきました。

それは最初、時々彼女の顔を横目で見る程度だったのが、だんだんとエスカレートしだし、仕舞いには、彼女が部屋で縫い物をしている時や、眠つている時などまで観察する様になつっていました。

そうしていないと落ち着かないのです。もしかしたら、この女が野宮を殺したのかもしれない、この女が、野宮の残した異物を懷に呑んでいるのかもしれない。もしかしたら、それを使って彼女は、あわよくば私まで殺そうとしているのかもしれないか……。私は、そんなどうしようも無い疑心暗鬼に心を食われ、終始この目で彼女の動向をこの目で確かめなければ、とても気が休まる事の無い程、疲れきつた体になつっていたのです。

そして、私が東京に戻るという前の晩。とうとうその妄想が、奇人の抑圧によつて生み出された產物が、私の眼前に、その忌ましい姿を顯わにする時がやつて参りました。

その夜、私がいつものように、夜遅く、こつそりと美香子さんの寝室を覗いた時です。音がしないよう、ゆっくりと襖を押し、細い隙間を作り、そこから中を覗いてみると、何故か部屋の中にはまだ明かりが灯り、その下に引かれているはずの布団は綺麗に折りたまられたまま。美香子さんの姿は、その狭い部屋のどこにも居ないのです。

私は嫌な予感がしました。それは虫の知らせともいふのでしょ
か、彼女が何かをしようとしてると私は直感し、玄関へ向かうと、
やはりそこにあるはずの彼女の靴が一足無くなっていました。いつ
たい、美香子さんはこんな夜中に何処に出かけたのかと、しばらく
思案を重ねたあと、結局思い当たる場所が、あの野宮が作ったとい
う池しかなく、私は寝巻きのままサンダルを突っ掛け、雅恵さんを
起こさぬよう、ソロソロと玄関の扉を開けて外に出ました。

その夜は、ちょうど十五夜で、ずいぶんと大きな月が出ておりま
した。いつもなら、そんな月を見上げて溜息でも漏らしていたので
しょうが、野宮の自殺や、色々と月に関する嫌な出来事もございまし
たので、私はできるだけ上を見上げないよう、薄つすらと月明かり
に照らされた、まるで海の底の様な杉林の間を、うつむきながら進
んでおりました。

とにかく美香子さんが何処にいったのか、それだけが気がかりで、
暗い夜道に転がった枯れ枝や、草木などに足を引っかき、いくら生
傷が増えようとも、ちっとも気にならずに歩き続けると、やがて私
の目の前に、黒々と立ち並ぶ不気味な木々の向こうに開けた空間が
見え、そこに、小さな人影が立っているのがぼんやりとわかりまし
た。

私は反射的にその場につづくまり、寝巻きが汚れるのも気にせず、
草木の間に分け入り、地べたを這いながら、林の切れ目まで進みま
した。そして、そこにあつた木の根元に体を隠し、そこからそつと
池の畔を除き見たのです。

するとどうでしょう、月明かりになびくスキの穂の向こう、池
の右側の畔に、黒い着流しを来た、美香子さんとおぼしき背中がは
つきりと見えたのです。

彼女は、別に何をする訳でもなく、ただぼんやりとこちらに背を
向けて立っているだけなのですが、それを見る私は、不安に押しつ
ぶされる胸の高鳴りを必死に抑えつけておりました。

なにせ、その左にあるはずの、毎晩見たときはあれほど鮮やかだ

つた紅葉の木が、今やまるで巨大な漆黒の化け物の様に変わり果て、それが、月を背にして、池に移りこんだ自分の姿を覗き込んでいる様に見えたり、「湧き水の」とく透き通っていた池の水も、夜の闇が溶け込んで真っ黒に染まっており、その背筋が冷たくなる光景の隅に佇む彼女もまた、そんな氣味の悪い造形物の一つに思えてきてしまうのです。

そして、私がそうやつて木の幹に顔を押し付けていると、ふと、彼女の両手がなめらかに動き、自分の襟に手をかけました。そして、するすると着流しに隠れていた、彼女の妖艶なうなじが、肩が、肩甲骨が顎になつてゆき、やがて、その黒い着流しが地面に落ちた時、私は思わず声を上げそうになつて、その両手を自分の口に押し付け、必死に息を殺してありました。

それは、月です。

彼女、その淫靡な程白い背中の中央に、夜空に浮かんでいるそれと、まったく同じ姿、形の見事な月が浮かんでいるのです。

もしや夢なのかと、私は自分の目を疑いました。ですが、やはりそこに月があり、そのすぐ斜め上の夜空には同じように輝く月光があり、その一つの月のある幻想的な景色は、どう目を凝らしえみても歪むどころか、よりはつきりとうす暗がりに浮かび上がって、いつのまにか震えたあしが、木の皮にガチガチとぶつかり、その痛みが私に現実である事を教えるはじめるのです。

そして、彼女は 背中に月を背負つた美香子さんは、その淫靡な白い肌をうねらせ、池に向かって、一步、また一步と足を進めていきました。その横顔は、まるで夢遊病者の「ことく虚ろで、まるで何者かに背中を押されている様にあります。そして、彼女足が、ついに冷え切った池の水に足が浸かった時、美香子さんの横顔には、気の触れた、禍々しい狂人の笑みが、べつたりとはりついているのが見えました。

それはまさに、月の化け物でした。もうすでに、彼女は私の知る美香子婦人ではなく、背中に月を宿した、淫らな欲望を剥き出しに

した化物　彼女は、そのまま両足を水に着けると、いきり立った様に水面を叩き付けたり、蹴り飛ばしたりて水しぶきを上げ、その動きに会わせて、彼女の背中の月も歪み、暗闇の中で蠢き続けるのです。

彼女はいつたい何をしていたのでしょうか……それはもしかしたら、水面に移りこんでいる夜空の月を、必死になつて壊そうとしていたのか、それとも、その月と戯れ、遊んでいるだけなのか、はたまその両方だったのか……とにかくそうやって、月光に照らされながら、笑いながら水しぶきに濡れてゆく、月を背負った彼女の肉体は、あまりにも妖艶で、陰惨で、気が付けば、私の心はすっかりあの月の部屋を見た時と同じ、いえ、それよりもさらにはつきりとした、まるで獣の様な禍々しい衝動が、爪先から頭のてっぺんまで、隙間無く私を乗っ取つて、意思を離れたその体は、目の前の狂乱の宴に混ざりうと、枯れ草の上を勝つて歩き始めてゆくのです。

やめろ、とまれ、とまつてくれ！……私は心中で叫び、もがき苦しみました。しかし、遅かったのです。何もかもが、すでに手遅れになつていたのです。

私はそつと、踊り狂う月の化け物の背に近づきました。彼女は私の姿に気が付くそぶりも見せず、ケラケラと氣味の悪い高笑いを上げながら、ひたすら水を叩いております。

そうして、ついに足が水につかり、彼女のすぐ後ろに立つと、まるで血の通わない、他人の様な私の手がゆっくりと伸びてゆき、その指先は、彼女の首にかかつたとたん、虎が獲物の喉もに暗いつくがごとく、その白いうなじに爪を立て、力いっぱい締め上げはじめたのです。

彼女はぐぐもつたうめき声を上げながら、必死に私の手を振り払おうとしました。ですが、私の腕はとまりません。彼女池の上でもがけばもがくほど、私の指は信じられない力で首元に食い込んでいき、彼女はそこから逃げ出そうと、精一杯体を捻り、池のほとりにその身を投げ出しました。私は仰向けになつた彼女の上にまたがる

ようにして、首の骨を押し折らんばかり力を込めあげると、まるで獣の呻き声の様な、とても女の口から出ているとは思えない悲鳴が辺りにこだました。

ですが、私はその時私が見ていたのは、ぶくぶくと泡の吹き出る美香子さんの口元や、締め上げるその細い首ではなく、私の下で隆起する肌の上で踊る、まさに生き写といつた、真に迫った月の彫物でした。

いつたいどれ程の腕前を持った彫師が、あれほどの月を描いたのか。今でも鮮明に思い出せるその絵は、今まで見てきたどの月よりも艶かしく色づいており、可笑しな事に、そんな月見ていると、妙に体に熱が宿り、私の肉体をのつとつていたはずの獣が、いつの間にか意識の隅々まで侵食し出し、今じぶんがしている行為が、殺人などという罪深きものに思えず、まるで愛人と情交を重ねる時のような、触れ合う肌と肌とに熱が籠り、喉をしめつける感覚すら魅惑的な快楽に変わつてゆき、自分の頬が段々と、歪な形に釣り上がりゆくのが解かつてしまふのです。

そして、そうやつて暫く馬乗りになつていると、いつのまにか声すら上げなくなつた彼女の頭が、最後に大きく仰け反り、遠吠えの様な奇声が響き渡ると、、ふつりと、まるで糸が切れた様に、彼女の体から一気に力が抜け落ちました。

不思議な感覚でした。彼女が死んだとわかつたとたん、私の視線の先にあつた美しい月の絵が、まるで油絵から、段々と絵の具が剥がれ落ちる様に、急にその色が褪せ始め、その魅力が崩れ去つてゆくのが痛い程わかりました。

そして、私は目の前の死体と、自分の両手を見比べているうちに、胸のうちに湧き上がり始めた、今しがた終えたばかりの、生まれて初めて人を殺した感覚に怯え、竦み、最後には、何かから身を守る様に、必死に草原に頭を押し付けていました。

怖かつたです。なにせ人を殺したのですから、怖くて当然です。

ですが、一番私が恐ろしかったのは、そうやつて殺していた最中

の自分が、まるで快楽を貪る鬼の様な、恐ろしい形相で彼女を絞め殺していたのだと、容易に想像できた事でした。

狂つてゐる、そう思いました。

何もかもが、全てが、自分が、池が、紅葉が、美香子さんの死体が、その背中の死んだ月が、その上に浮かぶ夜空が、月光が、なにもかもが狂い、歪みきつてゐる　　そう、思つたのです。

おそらく、あの野富が作り上げたものとは、まさに美香子さんやのものだつたと言えます。

彼は、月の研究をするうちに、ついに人間にその魔力を植え込むという妄想を抱いたのだと思います。そして、彼は美香子さんを手に入れ、その背中に、あのメモが記された絵画を彫り入れる事で、彼は彼女の体の中に、あの様な生き物のことを月を作り出す事に成功したのでしょう。そして、おそらく、彼は弁護士である私の様な、現実的にしか物事を考えられない人間に、その研究の成果を確かめてもらひたかったのだと思います。

ですが、彼もまた、私と同じ様に、あの奇怪な月に魅入られる事となり、美香子さんを鎌で切りつけ、襲つたのでしょうか、なぜか彼は彼女を殺すことはできず、反対に自分の命を投げ出すに至りました。

それは、実の所、野富は本当に彼女を愛しており、彼女を殺す事ができなかつたからなのか。それとも何か、他の理由があつたのかはわからりません、ただ、私には、野富のよつに自ら命を絶つ勇気など無く、罪の意識に際悩まされながらも、臆病にもその田舎を逃げ出して、遠い地に身を潜めながら、この様にひつそりと暮らすはじめになりました。

しかし、その代わり、私はその罪から逃げた代償として、その日から一度と、夜空に浮かぶ月を見れぬ、忌まわしい体になつてしまつたのです。そう、あの日から、ただの一度も、私は月を見上げたことはございません。ですから、夜道を歩かなければならぬ時は、

必ずこの様に、目深に帽子をかぶり、うつむきながら、恐る恐る進むなんて馬鹿げ真似を、かれこれ30年程続けてきたのです。

そんな私がもしも、この帽子を取り、その夜空見上げたならば。その様な恐ろしい事は、とても考えたくないませんが、きっと、そこには、あの美香子婦人の白く、なめまかしい背中が浮かび上がりおり、それに捕らわれた私は、今度こそ、橋の上から身を投げなければならないのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9659c/>

千一夜

2010年10月8日15時56分発行